

零落の雪

源氏物語叙景論序説

伊 奈 みなみ

はじめに

物語において、その情景によって作中人物の言葉では語られ得ない心情をひきだすのが情景一致という表現方法である。本論を「叙景論」とするは、物語に語られる景物に、たんに人物の心情をうつす情景一致にとどまらぬ意義を見出し、景物をめぐる叙述に物語が展開されゆくありようを考察することを目的とするためである。景物にどのようなものが想起され、物語が展開されゆくのか。もちろん、その叙述方法は直線的なものではなく、たゆたい、とどこおりながらも語り進められゆくものであると考えられる。本論では主に、源氏物語の雪を取り上げ、情景に想起される残像や面影として意識されるものを考察対象として、その物語の叙述に寄り添いながら、かたちづくられゆく物語の表現世界をみつめてゆくこととする。

春に爛漫とこぼれるように咲き誇る桜は美しいが、はらはらと舞い散る桜もまた耽美的である。時に美は退廃的であり滅びと共にもある。雪にもまた、そのような一面がみられる。その中でも、零落とともに描かれる雪はまさにそのような一面を持つ。本論では、零落の雪は衰退の兆しがみられる宮家の背景として描かれることに着目し、正編にみられる零落の雪、及び宇治の世界にみられる零落の

雪を、同時代の作品も視野にいれつつ考察を進めてゆきたい。正編では末摘花と朝顔を。宇治は山里としての感覚が強く、都とは逸脱した山里を象徴する背景として雪が存在するものだけでなく、八の宮の存在が強く意識される空間であり、その中にいる大君をとりまく雪をみる。正編と宇治十帖、同じ雪という叙景描写ではあるが、これらの中の同一性と同時に独立した意図を、その表現方法を追いつながら、あきらかにしてゆきたい。

一

源氏物語にみられる風景描写のひとつである雪を研究するにあたり、その研究史をまとめる。主な対象としては、源氏物語の雪、同時代作品との比較、そして文化的視点を持った論文である。雪に触れている論文は数多くあるが、雪を中心に重点的に論じたものは決して多くはない。ここに挙げるのは、雪に関して物語全体を視野に入れたものである。

まずはじめに、藤村潔氏「雪―源氏物語―」¹⁾は早く、雪の物語中における降り方と冷たさを追求しており、「源氏物語の雪は季節のきわだった景物のひとつとして、人の世の行事や物語の場面にきわ

めて意図的に組み込まれている」、「源氏物語の雪は、物語の主人公の孤独な心の世界にかかわって、特に白く冷たいように思われる」と述べている。次に森岡常夫氏「源氏物語の雪」²は、先の藤村氏よりも更に視野を広げ考察している。枕草子との比較、雪と月、末摘花・朝顔・明石・女三の宮と言った人物にかかわる雪、二条院・宇治等の場所と雪の関係、などと分類をしての考察がみられる。そして最後に「源氏物語における雪諸相をあげてその美意識を検討し、最後に雪の場面を人間の運命や事件との関連において考察したのであるが、主題の根幹に触れる最も深刻あるいは哀切な部分において、雪の場面を取り入れられている事実が認められるのである」と結論付けている。

小山利彦氏「源氏物語にみる雪の表現―その心象と方法など―」³は、まず雪の描かれている場面を順に挙げて分類し、次に表現を検討したうえで、末摘花・明石・大君・浮舟を中心に分析している。小山氏は「雪は通り一遍の冬の美景に留まらず、むしろ荒涼とした景物人物の中に配され、冷さ・侘しさ・辛さ・厳しさ・悲嘆・懊悩といった物語空間を醸し出していた」と述べており、雪が持つ負の意味に特に注目している。さらに林田孝和氏「源氏物語にみる雪の精神史」⁴は、万葉集や枕草子など平安王朝における雪を検討しつつ、源氏物語の雪を場面ごとに取り上げ分類しており、その中でも特に雪と霊のかかわりについて考察されている。そして三苦浩輔氏「源氏物語の雪、絶望と滅びの徴」⁵は、森岡氏の論考の影響を多く受け、万葉集・古今集・伊勢物語との比較、末摘花・明石の人物と雪、六条院の雪・宇治の雪、などの項目が挙げられている。しかし主に重点が置かれているのは死や霊であり、桐壺院・六条御息所・柏木・

源氏・大君の死、鬚黒大将北の方・六条御息所の霊が扱われている。多く源氏物語の雪の各例を挙げながら分析を加えたうえで、その中から主題への考察を深めている。また、同時代の古今和歌集や枕草子との比較の上での検討もみられる。森岡氏は、枕草子と源氏物語の雪のありかたの違いを明らかにし、枕草子は「清少納言の鋭敏な色彩感を示している」とし、源氏物語は「紫式部の聴覚的傾向が、ここに伺われるのである」と分析する。そして、「枕草子の雪は、主として庭園のものであって、「をかし」、「めでたし」というような優美の一面のみが把握されていたのであるが、源氏物語の場合は、作者の心が作中人物を通して雪に投入されることが多いのであるから、それは単に優美にとどまらず、憂愁の風情あるいは荒涼たる情感を呈し、時には人の生を圧倒するような凄まじさや厳しさを伴うのである」とまとめる。和歌にみられる雪表現は、雪月花のひとつである雪を意識したものが多く、月とあわせて論じられている。しかし源氏物語には、美しい雪だけでなく、雪の持つ負の意味をみたものも多くある。それは、雪と死、雪と霊、にみられるように、万葉集・古今和歌集・枕草子などとの比較によっても、他の作品にはみられない源氏物語の特有の表現方法をみせている。

本論においては、源氏物語に描かれる美しくも儂い雪ではなく、重く意味を持つ零落の雪に特に着目する。宮家でありながらも父宮の逝去により、残された姫君が宮家の衰退とともに零落を象徴する雪の中に描かれる。しかしながら類似した傾向がみられる中にもそれぞれ独自の零落の雪がそこには在る。

正編において、宮家に降る雪は家の衰退の象徴である。それは、末摘花と朝顔の姫君からみて取れる。父宮不在の、ひとり残される宮の姫君、その行く末とともに描かれている。父宮の亡き邸は次第に荒廃してゆく姿をみせ、その荒れ具合は雪と共に描かれる。

森岡氏は、末摘花邸・朝顔邸・桐壺院の死・須磨・六条御息所の死・宇治、の場面に描かれる雪を挙げ、荒涼とした様子がみられるとしている。そして特に末摘花と朝顔において「この場面で取り上げられている雪は、人生のやるせないわびしさを表現することに深くあずかって、印象的である」と論じる。

末摘花は、その屋敷の荒れ果てた様子が雪の降る中に誇張される。雪は主に、「いとど愁ふなりつる雪かきたれいみじう降りけり。空のけしきはげしう、風吹きあれて、〔末摘花①二九一頁〕」など雪がひどく降っている様子が描かれる。

かろうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、前裁の雪をみたまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空もみたまへ。つきせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかへて見たてまつる。〔末摘花①二九一頁〕

源氏が末摘花の邸をおとづれた翌朝の場面である。源氏が「格子

手づから上げたまひて」みた庭には、「前裁の雪」が広がる。それは、「踏みあけたる跡もなく」ある雪景色であり、「はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに」が「荒れわたりて」の景色にも「あはれ」である様子が感じられる。また、三苦氏も「荒れる」、末摘花邸の雪に対し「雪をもつてしても救い得ぬ荒れ屋ということであつた」と論じる。末摘花に伊勢物語との関連をみて「彼女に豊稷の雪女の資質をみるのがひとつ、いまひとつは、末摘花物語の主題をなす「荒れたる宿」の絶望的な暮しが光源氏の暗澹鬱な思いをふくめて雪をとおして表現されているということである」と述べつつも「荒れたる宿」に物語の重点が置かれていることを認めている。このように、末摘花の描写には、「空」、「風」、「荒れる」、「さびしう」が繰り返し描かれ、その荒廃した様子を明らかにしている描写の中にある雪が末摘花の特徴である。

また、特に「御門」の描写はやはり特徴的である。家としての衰退が決定的にあらわれている。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろほひて、夜目にこそ、しるきながらもよろず隠るへるに、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してもあはれなるを、〔末摘花①二九五頁〕

「御車寄せたる中門」とある「御門」は、「いといたうゆがみよろほひて」というひどく古びてしまっており、さらに「いとあはれにさびしく荒れまどへる」と形容される。また、「うらやみ顔に、松の木のおのれ起きかへりてさとこぼるる雪も、〔末摘花①二九六頁〕

にもみられるように、「松の雪」、「松の木」に「こぼるる雪」、にある松は、かつての栄光を想起させるものであるはずが、雪が降り積もり、ここではもはや永久の象徴ではなくなっている。

しかし、「いとあはれにさびしく荒れまどへる」ものであり、「山里の心地して」とはあるが、「ものあはれなるを」と続いており、「雪少し降りたる光」とある。「荒れ」や「さびしう」の様子が強調されるなかにも、「あはれ」が感じられるのが正編の特徴である。

東の妻戸おし開けたれば、むかひたる廊の上もなくあばれたれば、日の脚ほどなくさし入りて、雪少し降りたる光に、いとけざやかに見入られる。
〔末摘花①三〇三頁〕

やはり正編に描かれる雪は、その美しさを伴い、それは「雪少し降りたる光」は「いとけざやかに見入られる」ほどのものである。「雪の光に、いとどきよらに〔末摘花①二九一頁〕」とも、「雪の光」の美しさの中に描かれ「雪」の「光」が強調される描写であり、雪が荒廃した屋敷と描かれるのと平行して、美しき風情を漂わせるものとしての効果を持ち合わせている。

続いて、朝顔の姫君にも雪と零落の関係がみてとれ、現実と幻想とが交差しているかの如く描かれる。

雪うち散りて艶なる黄昏時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよたきしめたまひて、心ことに化粧じ暮らしたまへれば、いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。

〔朝顔②四七九頁〕

鈍びたる御衣どもなれど、色あひ重なり好ましくなかなか見えて、雪の光にしみじく艶なる御姿を見出だして、まことに離れまざりたまはばと忍びあへず思さる。
〔朝顔②四八〇頁〕

朝顔のもとへとおとづれる源氏を形容する描写である。「雪うち散りて艶なる黄昏時に」、「雪の光にしみじく艶なる御姿を」と描写されている。この場面では「艶なる黄昏時」を背景として、はららと散る雪は、「光」を纏った輝きと共に、幻想的で優美に描かれる。源氏の美しき姿を際立てる背景として彩りを添えているのである。

御門守寒げなるけはひうすすき出で来て、とみにもえ開けやらす。(中略) 昨日今日と思すほどに、三十年のあなたにもなりにける世かな、かかるを見つつ、かりそめの宿をえ思ひすてず、木草の色にも心を移すよ、と思し知らるる。口ずさびに、
いつのまに蓬がもととむすばほれ雪ふる里と荒れし垣根ぞやや久しうこじらひ開けて入りたまふ。
〔朝顔②四八一頁〕

しかし源氏のそのゆく先は、荒廃しかける様子を現実として視線の中に捉える。末摘花の巻にみられる程にまでは荒廃していないが、「御門」への描写から、この先に待つ零落を見据えることが出来る。ここでも同様に、「荒れし垣根」と「荒れ」が明記され、「雪ふる里」と、雪に埋もれゆく「里」として朝顔邸を捉えた視線がある。

月さし出でて薄らかに積もれる雪の光あひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

〔朝顔②四八五頁〕

けれどもやはり、「月さし出でて薄らかに積もれる雪の光あひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり」のように、より一層感じられる「月」に照らされる雪景色の美しさが感受され、不安定な現実と幻想の交差が入り混じって描かれる世界は、その不確かな揺れをも象徴しているのである。

正編には、宮家として没落した末摘花、零落し得る朝顔の姫君が描かれる。同じように、宇治でも父宮不在の宮家が描かれるが、宇治は都とは異なり雪が深く降り積もる地である。この正編においては、父宮不在の宮家であつてもやはり「あはれ」や「艶なる」もの、また「月」などの「光」を伴い雅に描かれる。しかし宇治と都では雪のありかたに異相をみせるように、深く冷たい雪をみせる。椎本の巻においては、人々の訪れが遠くなつた様子により、屋敷の寂しさや、不在を提示しており、降り込められゆく雪の中に埋もれゆくことを選ぶ大君の姿がある。

三

宇治十帖にみられる大君の心に密接して降る雪は、正編にみられるような、幻想的な月や光と共に「あはれなる」美しさを以って描かれる類いのものではない。正編の都に舞う雪のような感覚を受容し継承しつつも、都空間にありながら何処か宇治世界への導入的要素を持ち合わせる勾宮の雪。そして、宇治に降り積もる雪。華やいだ都と異にする宇治の世界そのまま、音の中で静寂に、深々と降り積もるのである。

本節では、椎本の巻にみえる雪を追いながら、その表現方法にみえる意識をあきらかにしてゆきたい。山里である宇治は、都よりも雪深い地である。都と山里、その違いからも雪の在り方には差異がみられるのは道理の上にもそのように在るべきである。そして、正編と宇治世界では更なる異なりをみる事が出来る。その中間に位置する勾宮三帖は、宇治十帖にみられるような、深雪の感覚とは少し異なるのである。

道のややほど降るに、雪いささか散りて、艶なる黄昏時なり。
物の音をかしきほどに吹きたて遊びて入りたまふを、げにここをおきて、いかならむ仏の国にかは、かやうのをりふしの心やり所を求めむと見えたり。
〔勾宮⑤三四頁〕

正編の光源氏世界を回顧させるような、絢爛を残した都世界にみられる景色として雪が「道のややほど降るに、雪いささか散りて」のように描かれ、それはこの先にある宇治に降る雪とは異なる雰囲気を持ち合わせている。それは、「艶なる黄昏時なり」と表象されるようなものであり、六条院という、まさに光源氏世界の象徴である場所へと「物の音をかしきほどに」と「遊び」を伴って勾宮が向かう場面である。正編から宇治十帖へ、その間に描かれる勾宮三帖の始まりに描かれる雪は、都に舞う雪が「をかしき」ものと描かれるも、同時に「いかならむ仏の国にかは」からは、何処か宇治世界を彷彿とさせるような雰囲気をはんのり持ち合わせながら、そのはじまりが描かれている。

次に雪が物語の世界に降るのは、宇治の地である。正編とは逸脱

した雪が積もる地では、匂宮の巻に垣間見られた異質なものが際立つてくる。山里に降る雪は重く、雪に閉ざされた世界にみえるものとは如何なるものであろうか。

正編からも、匂宮三帖の世界からも、隔絶した空間である宇治に降る雪は、八の宮没後の初めての冬に描かれる。その雪は、ただ山里に寂しく降る雪なのではなく、ひたすら深く降り積もるものであり、それは八の宮を象徴するものとして雪の降り積もるものであり、宇治の地は物語を追うごとに、段々と雪が深くなりゆくのである。

来し方を思ひつづくるも、何の頼もしげなる世にもあらざりけれど、ただいつとなくのどかにながめ過ぐし、もの恐ろしくつつましきこともなくて経つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人影も、うち連れ、声づくれば、まづ胸つぶれて、もの恐ろしくわびしうおほゆることさへそひにたるが、いみじうかへがたきこと」(中略)雪、霰降りしくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、今はじめて思ひ入りたらむ心地したまふ。

〔椎本⑤二〇三頁〕

八の宮の没後、季節は流れ、秋が過ぎゆき、冬の到来が描かれる場面の始まりである。宇治は、「風の音も荒らかに」、「いづくもかくこそはある風の音なれど」と、「風の音」が強調され「もの恐ろし」と繰り返し形容され、八の宮の不在による不安があらわれる描写となっている。そして雪は、「雪、霰降りしくころは」と、山里にある雪らしく、一面雪に覆われた世界が初めに提示される。ここに、「今はじめて思ひ入りたらむ心地したまふ」という心内描写があるのは、

これまで気がつくことのなかった宇治の地の恐ろしさを、八の宮の不在によって「今はじめて」知ることとなった、雪による再認識の象徴である。

「風の音」とは、ここで特出する描写ではなく、秋、八の宮の死の直後にも「野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに、ともすればあらそひ落つる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝もひとつものやうにくれまどひて、〔椎本⑤一九一頁〕」のように描かれる。「あらそひ落つる木の葉の音」など、この秋の頃にみられた「風の音」と、冬になってみられる「風の音」とは明らかに異なりをみせる。決して「もの恐ろし」ではなく、「水の響き」や、「涙の滝」と共に涙を誘うものとして描かれている。それが、冬になり雪が意識されると「風の音」は、「もの恐ろし」と規定されるものとなる。

この没後すぐの秋には、雪の他に八の宮没後の宇治にみられる情景描写として、霧が意識される。椎本においては、八の宮没後からすぐにある初めの霧の例より、冬となり雪降る景色となるまでの、五例のみにしかみられない特有の描写である。

椎本において、その生前に霧が描かれ得ないのは、追悼を意味する所以である。霧は人々を包み込むようなそんな感覚の中、追悼の意識と共に、その死による哀しみや不安に揺れる想いをみる事が出来る。けれども霧は追悼の想いであり、八の宮追憶へと意識させるものではない。追憶へと導くものは霧ではなく、雪であったのである。「今はじめて」に感じる雪は、秋から冬へと移り、雪の降る中、はじめて八の宮の不在を明確に感じた、不在への気付き、という意識が窺える。雪は、八の宮を象徴するものなのである。

法師ばら、童べなどの登り行くも、見え見えせずみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でたまふ。
〔椎本⑤二〇四頁〕

姫君たちは雪景色に八の宮不在を感じる。八の宮の生前には頻繁に交流があつた人々とも今はもう疎遠となつてしまひ、たまにあるおとづれをうれしく想うも、「法師ばら、童べなどの登り行く」人々を見送る姫君たちは「泣く泣く立ち出でたまふ」のである。人々が登りゆく山はその姿が「見え見えせずみ」する程であり、八の宮の空間が如何に「いと雪深き」といふ、一面銀世界であるかが提示されている。

(大君) 君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにかとは見る

中の宮、

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば
うらやましくぞまたも降りそふや。
〔椎本⑤二〇五頁〕

人々を見送つた後、大君と中の君は哀しみを分かち合いながら語らい、歌を詠み交わす。大君の歌には、「君なくて」の父八の宮の代わりに、「松の雪をもなにかとは見る」と、「松の雪」をどのよう^にに想うかを中の君に問いかけている。それに対し中の君は、「奥山の松葉につもる雪」をせめて「消えにし人を思はましかば」と、雪を父八の宮と想うことが出来たら、と返す。八の宮追憶の雪である。それは、「うらやましくぞまたも降りそふや」と、その想いに応えるが如く、段々と雪が降り添い、宇治の地が雪深くなってゆくこと

を示しているのである。その深雪の中を、薫はおとづれる。

四

八の宮の亡くなりし時より、霧に包まれた秋、雪に覆われた冬、桜の咲く春、と季節が矢継ぎ早に過ぎゆく。哀しみに暮れていた、八の宮追悼への霧が包む秋から、移り変わりゆく冬に降る雪は、今は亡き八の宮を偲び想起させ得る媒体、象徴となつた。八の宮を包んでいた霧が去り、冬になり雪が降つたその時、その不在であつたはずの空間に降り積もる雪に八の宮の存在を感じたのである。

雪、霰降りしくころは、いづくもかくこそはある風の音なれど、
今はじめて思ひ入りたらむ心地したまふ。
〔椎本⑤二〇三頁〕

「雪、霰降りしく」の雪景色に大君は「今はじめて」父宮の存在が不在である「心地」であることに気が付かされるのである(第三節参照)。そしてその瞬間から、宇治の地は深雪に包まれるが、そのひたすら深くある深雪の中を薫はおとづれる。

雪もいとところせきに、よろしき人だに、見えすなりにたるを、
〔椎本⑤二〇五頁〕

それは、雪を踏みわけて参り来たる心ざしばかりを御覧じわかむ御このかみにても過ぐさせたまひてよかし。

〔椎本⑤二〇九頁〕

「雪もいとところせきに」と、雪がひどく降り積もっており「よろしき人だに、見えずなりにたるを」とさえ言われる程の道のりである。また「雪を踏みわけて」と、薫は寂然の宇治空間を「雪を踏みわけて参り来る」おとづれなのであり、宇治に「踏みわけて」来なければならぬほどに降り積もった雪が描かれている。次々と重ねられる表現に雪が次第に深く深くなってゆくことがみえる。森岡氏は、宇治の雪が「人事と調和融合して最も印象的であるのは大君の死の折であろう」とし、それは「大君の死と薫の救いよのない嘆きを取り巻く世界として、宇治の山里の雪は、適切であった」と述べる。

「雪、霰降りしくころは〔椎本⑤二〇三頁〕」に始まる、椎本における宇治世界の雪の情景は、段々と雪が降り積もりゆく、雪深く閉ざされた空間となってゆくのである。大君が雪の情景を前に、父八の宮の不在を確認したその瞬間から、この宇治の地ではひたすら深く雪が降り積もってゆく深雪の宇治となるのである。この薫の「雪を踏みわけて」のおとづれは、伊勢物語、第八三段「小野」からの引用がみられる。

正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪もいと高し。(中略)

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは
〔伊勢物語〕第八三段「小野」一八六頁〕

伊勢物語「小野」の章段は、在原業平と思しき男が、出家をされ

た惟喬の親王のもとへと、雪の中を、比叡の山、小野の里へとおとづれる場面である。比叡や宇治といった奥まった雪深き地へと雪を踏み分けておとづれるのが重なる。

そして薫と大君による恋の贈答場面が描かれるが、ここには同時に宇治の里が雪深い山であるという雪山観念が感じられる場面引用である。

(大君) 雪ふかき山のかけ橋君ならでまたふみかよふあとを見ぬかな

と書きて、さし出でたまへれば、「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」とて、

(薫) つららとち駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ

さらばしも影さへ見ゆるしるしも、浅うははべらじ

〔椎本⑤二〇九頁〕

このふたりの歌の贈答には「ふみかよふあと」と、引き続き伊勢物語からの引用がみられる。「雪を踏み分けて〔椎本⑤二〇九頁〕」おとづれた薫へ、宇治空間が「雪ふかき山」であることを明確化するのと同時に、大君は薫が「雪ふかき山のかけ橋」であることを示し、薫の他にまだ「ふみかよふあと」もない空間であることを提示する。しかし続いて薫により「つららとち駒ふみしだく山川」と、閉ざされた雪の宇治空間をみずから「しるべしがてらまづやわたらむ」ことを提示する。八の宮の雪という包まれた空間の中にいる大君ではあるが、薫という存在によって開かれている。「ふみかよふ

存在として薫を見定め、「つららとち」の境界を超える「まづやわたらむ」の薫が描写から窺える。

また、この「雪ふかき山」は、のちの総角の巻にみられる薫の歌にも「雪の山」と詠み込まれている。

恋わびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし

半ばなる偈教へむ鬼もがな、ことにつけて身もなげむと思すぞ、
心きたなき聖心なりける。
〔総角⑤三三三頁〕

大君の亡くなりし後、薫は雪の降り積もりゆく中で歌を詠む。新全集の頭注には「目前の雪景色から雪山（ヒマラヤ山）を連想、さらに雪山童子（釈迦の前身）の故事に発展する。「雪の山はくすりのある所也。されば死ぬるくすりもあるべし」（細流抄）」とあるように、雪山童子の故事からのものである。ここからも、先程の伊勢物語の引用と同じく、或いはそれ以上に、仏教的な観念がふたりの意識に織り込まれている。

宇治の里に降る雪が深いことから雪山へと意識されるが、小山氏は、源氏物語の雪の表現方法を論じるにあたって、どの程度を大雪と考へて良いのかについて触れている。高橋和夫氏「雪まろげ―雪の美―」は、万葉集・枕草子との比較を中心に文化的にみる雪山を検証したうえで、源氏物語の雪まろげ場面を月との関わりと共に述べている。また、目崎徳衛氏「王朝の雪」は、特に源氏物語と雪について触れているわけではないが、平安王朝における雪山がどのようなものであったのかを、日記や記録書などの文献から非常に細か

く検証している。

枕草子にも雪山の章段が描かれ、それは「雪いみじう降りたる」をきっかけに雪山をめぐる物語が展開される。

師走の十余日のほどに、雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、縁にいとおほく置くを、「同じくは、庭にまことの山を作らせはべらむ」とて、侍召して、仰せ言にて言へばあつまりて作る。
〔枕草子〕第八三段 一五四頁

「身は投げつ」とて蓋の限り持て来たりけむ法師のように、すなはち持て来しがあさましかりし事（中略）いみじく笑ふ。

〔枕草子〕第八三段 一六三頁

源氏物語にも枕草子にも同じ雪山という素材として描かれてはいるが、その意味と役割は大きく位相をみせている。枕草子における雪山は「身は投げつ」と雪山伝説が意識されるも、それは「いみじく笑ふ」と滑稽に描かれるものであり、枕草子の雪山の役割はいつまでも在るといふ現状の存続と維持、存在の誇張を求めている。しかし源氏物語、宇治にみられる雪山は、同じように雪山を意識しながらも、物語は仏教的観念を感じさせる雪山に段々と大君を埋もれさせてゆく象徴とする。

薫と大君の間には、仏教的観念を通したつながりが意識される。宇治とは境界をもった異界であるが、雪山も異界そのものなのである。そして、自ら「雪ふかき山」と詠む大君は、まさに雪山に籠っている存在である。この宇治の雪山は仏教的観念に覆われ捉われた

八の宮の空間であり、現世にありながら降り込められた世界、雪の八の宮に内包される大君なのである。その中で薫と大君は贈答を交わす。ふたりは八の宮の空間である宇治に、亡き八の宮を追憶させる雪を前に背景としても、恋と呼べる雰囲気も感覚をも意識の中に持ち合わせているのである。

暮れはてなば、雪いとど空も閉ぢぬべうはべり

〔椎本⑤二二〇頁〕

けれども、この「雪いとど空も閉ぢぬべう」という従者の言葉からは、薫ではない者である故に、ただ山里の雪として捉えているのか、或いは再び閉ざされようとしている空間とみることにも出来る。薫が去れば、元の閉ざされた空間に戻ってしまう恐れの中、ある変化の可能性を秘めつつも、従者の言葉により、現実が告げられ、薫は帰途につくのである。

法師ばら、童べなどの登り行くも、見え見えすみ、いと雪深きを、泣く泣く立ち出でたまふ。

〔椎本⑤二〇四頁〕

年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の水とけたるを、ありがたくもとながめたまふ。聖よりの坊より、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり。

〔椎本⑤二二二頁〕

さらに、「いと雪深き」雪の中を去りゆく者があり、それを見送

る姿が「泣く泣く立ち出でたまふ」と強調的に描かれているが、「年かはりぬれば」になると、雪の中をおとづれる者の姿が描かれている。薫のおとづれを間に挟んでのこの変化は、薫によって齎された効果の可能性としてある揺れる空間が描かれている。

(大君) 君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る

中の宮、

奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば
うらやましくぞまたも降りそふや。

〔椎本⑤二〇五頁〕

(大君) 君がをる峰の蕨とみましかば知られやせまし春のしるしも

(中の君) 雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにして

〔椎本⑤二二三頁〕

薫や聖の方からのおとづれがある中で、物語中に大君は中の君との贈答を繰り返す。宇治の邸に降る雪は、大君にはそのまま八の宮を想起させるものであり、同時に何よりもその存在を象徴するものでもある。大君にとつて雪は常に、父宮へと想いが馳せられる媒体なのである。しかし、八の宮の幻影を追いかけて揺れる大君に中の君は賛同しつつも、その不在を明示し確認させるのである。ここは、椎本の巻における、雪の最後の例であるが、最後まで大君は雪に八の宮の残像を求め、中の君は不在を示すのである。

雪とは、様々な表情を持つものである。風の音を伴えば恐ろしく、

闇の中、月に照らされれば、光り輝く。美しくも恐ろしいものであり、それは宇治になると何処までも深く降り積もる雪へと姿をかえた。

大君は深雪の中、八の宮の幻影に抱かれる。その意識は大君の中に強くみられ、既に不在のはずの父宮を追い求める。雪は八の宮不在を想起させ、同時に追憶への媒体となるのである。八の宮の名残の深雪は大君を導くものとなり、自らの死にゆく時も雪に包まれ薫にその意識を残してゆくのである。宇治にまつわる雪は、不在を示し、想起起こすものとなり、また介入へと誘うものとなるのである。

むすびに

源氏物語に描かれる雪の叙景描写と零落について論じた。正編の末摘花と朝顔、宇治の大君。この三方には一つの共通点がみられる。宮家でありながらも、父宮没後に薄れゆく存在が、雪と共にその零落してゆく様子が重く描かれる。同時にその雪はまさに零落を象徴するものとして存在している。しかしながら、正編にて末摘花の雪を想起させるか如く朝顔が継承したようには、宇治の雪は描かれな。零落の雪としては一貫して普遍的であるが、正編と宇治ではその模様に少し位相がみられた。

宇治に降る零落の雪は、八の宮への想いという共通概念が感じられる。宇治とは雪深い地であり、そこには山里であることのみならず、八の宮の名残故の深雪である。八の宮に集約される雪は、不在の象徴であると同時に追憶への媒体としての特徴を持つものと考えられる。

以上、物語における叙景のありようを、雪を対象としながら検討を試みた。そこに描かれる雪はただ景物として、また、たんに人々の心情をうつし窺い得るものとしてあるものにとどまらない。ときに人々の心にさまざまに残像や面影を想起させ、ときにあらたな物語の展開へといざなうものとして機能していると考えられる。そのような意味において、物語における叙景は、物語世界を構築するうえできわめて重要な方法であり、叙景をみることによってあきららかなる意図が見出せるのである。

註

- (1) 藤村潔「雪―源氏物語―」国文学二一七 昭和五一年六月
- (2) 森岡常夫「源氏物語の雪」『源氏物語の考究』風間書房 昭和五八年六月
- (3) 小山利彦「『源氏物語』にみる雪の表現―その心象と方法など―」『源氏物語を軸とした王朝文学世界の研究』桜楓社 昭和五七年十月
- (4) 林田孝和「源氏物語にみる雪の精神史」『源氏物語の精神史研究』桜楓社 平成五年四月
- (5) 三苦浩輔「源氏物語の雪、絶望と滅びの徴し」『源氏物語の伝承と創造』おうふう 平成七年二月
- (6) 高橋和夫「雪まろげ―雪の美―」『講座源氏物語の世界四』有斐社 昭和五五年十一月
- (7) 目崎徳衛「王朝の雪」『平安時代の歴史と文学 歴史編』吉川弘文館 昭和五六年十一月

なお、本稿における本文については『源氏物語』をはじめとして小学館新編日本古典文学全集によって頁数を記した。小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』・『伊勢物語』・『枕草子』